



平成25年の新年早々、しかも例年にない大雪に見舞われたこの時期に、秋田県各地はもとより、新潟県、山形県、岩手県からも参加をいただき、総勢43名で開催することができました。秋田県初のラウンドは、名物ぎりたんぼ鍋のように熱い時間となり、開催にあたっての各方面からのご協力に感謝いたします。

1 話題提供 「実践から学ぼう系統性」

今回は、秋田県から3つの実践について話題提供がありました。

大館市立東中学校の田村先生からは、武道・ダンス・陸上競技の取組の紹介がありました。「学習内容の系統を踏まえ、確かな学力を身に付けさせる指導方法の工夫改善」を主題として、わかる・できる・関わり合う授業づくりを目指し、学習指導要領の趣旨や指導内容を踏まえた、年間指導計画と単元構造図、指導と評価の計画の作成について具体的な取組と資料の提示がありとても参考になりました。

次は、大仙市立大曲中学校の佐藤先生から、「学習指導要領の趣旨を具現化するための指導方法の工夫改善に関する研究」を主題として、球技、体づくり運動、保健学習を中心に取組の紹介がありました。特に、3カ年にわたる体づくり運動実践の実践の、各学年における「体ほぐしの運動」や「体力を高めるための運動」の学習内容に応じた取組の具体は、中学校だけでなく、小学校や高等学校との接続を考える機会となりました。



最後は、湯沢市立湯沢北中学校の鈴木先生から、「授業改善に結びつく、系統性を意識した小・中連携の取組」を主題とし、小中併設校の利点を生かした体育科経営や器械運動の実践の紹介がありました。授業づくりの土台となる、体育科経営面での連携による様々な取組は、大変興味深いものでした。



2 グループ協議

話題提供を受けて、実践内容や系統性、小中、中高の接続について、普段の悩みも打ち明けながら熱心な協議が行われました。小・中・高・大学・行政それぞれが現状を出し合い、連携のあり方や授業づくりのノウハウ等を共有しました。「領域を小中高縦に見ることで、今後の指導の幅が広がった。」、「学校間や研究会、行政等との連携の大切さを実感した。」、「評価の考え方が勉強になった。」、「実践発表の質が高くて驚いた。」、「よいネットワークができてよかった。」などの声がありました。

3 まとめ ～佐藤 豊 先生から～

佐藤豊先生からは、話題提供や協議を受けて大きく2つの視点でまとめがありました。

小中連携はハードの確立よりもソフト（マンパワー、コミュニケーション=信頼関係）が大切です。

- ・連携とはいうが、システムの構築と運営の難しさがある。行政主導の面と現場での両面で取り組み、「小さなことからこつこつと」草の根運動が大切。

公教育のミッションとして取りこぼしが無いようにすることが大切です。

- ・学年が上がれば大きくなる差をいかにして早めに拾い上げていくか。そのための情報収集と発進が大切である。学習内容を書き出した結果が単元構造図で、いかにその領域の楽しさに触れさせるかが大切である。見逃しが無いかをチェックするのが評価の根底である。これと、教師の感覚から評定につなげる。言語活動の充実や思考力、判断力、表現力の育成を図りながら、技能だけの評価（できる、できない）からの脱却をしていくことが大切。

